『大阿弥陀経』に描かれる衆生の考察

佐々木　大　悟

問題意識

『無量寿経』には多様な衆生が描かれている。たとえば「国中人天」「国中菩薩」などの語があるが、これらは実際には違うものを指している。しかし、これまでその差異にあまり強い関心は払われてこなかった。[①] 私はこの経典に出てくる衆生を表す言葉に興味をもち、分類していこうと考えた。『無量寿経』の衆生を押さえるためには最古の異訳である『大阿弥陀経』（以下『大阿』と略す）をまずしっかり押さえる必要がある。本論文では、『大阿弥陀経』に描かれている衆生を分類し、吟味していく。（最近、辛嶋静志氏によって『大阿弥陀経』の訳註が出されはじめた。[②]『無量寿経』の異訳としての側面だけでなく、ごく初期の大乗経典としても注目度が高いこの経典は、今後さらに研究されるものと思われる。）

方法論

『大阿』に出てくる衆生を、蜎飛蠕動之類・諸天人民・菩薩阿羅漢・阿羅漢・辟支仏・菩薩に分けて分類した。それぞれを分析しその特徴を抽出した。分類することによって、たとえば「阿羅漢」はどんな単語と親近性があるか、（もしくはないか）などを見出すことができる。[③]

これらの衆生の価値を判断する際に、列挙の順番を大事にした。「八方上下諸無央数仏・辟支仏・菩薩・阿羅漢」などのように並列的に書かれている場合、その順番にはしっかりと秩序があると私は見ている。主に価値の高い順に並列されている（低い順の場合もある）。決してでたらめに書かれていない。その法則性を利用した。

『大阿弥陀経』には是間（娑婆）と須摩題（極楽）の二つの仏国土が出てくる。そのため、いずれの国の話なのかに注意を払ってそれぞれを分析する必要がある。

何回も文章に当たり、難解な箇所を全体の文脈から少しずつ解消していくという方法をとった。一箇所で判断しきれない言葉も経典全体をくまなく見るといたるところにヒントが隠されてあり、それらの情報を総合すると、『大阿』においてそれぞれがどのように定

義されてあるかが、かなりのレベルでわかる。文献内在的な作業である。

これはこんがらがった糸を時間をかけて一本一本ほどいていく作業に似ている。整理するだけでも意義があると信ずる。

分析

【蜎飛蠕動之類】

まず最初の分類の対象は「蜎飛蠕動之類」「男子女人」「泥犁禽獣薜荔」などの悪い境界の者である。それらをここでは「蜎飛蠕動之類」という一番多く出る表現でまとめて、表題で表した。

まず「男子女人」という言い方は『大阿』に二回登場する。

其有善男子善女人聞阿弥陀仏聲、慈心歡喜、一時踊躍、心意淨潔衣毛爲起、涙即出者、皆前世宿命作仏道、若他方仏故。菩薩非凡人。其有人民男子女人、聞弥陀仏聲、不信有者、不信経仏語、不信有比丘僧、心中狐疑都無所信者、皆故從惡道中來生、愚癡不解宿命。(『仏説阿弥陀三耶三仏薩楼仏檀過度人道経』大正十二・三一七上。以下の引用ではページ数のみを示す)

ここでは「不信」であり「狐疑」であるため、あえて「善」の字をつけずに「男子女人」と描かれている。『大阿』では善男子善女人と区別して別に「男子女人」というやや低い境界のものが描かれている。

次に「蜎飛蠕動之類」であるが、二種類の使い分けがされている。一つは、「諸天人民及蜎飛蠕動之類」と「諸天人民」にくっついて登場する場合である(二十六回)。これは「蜎飛蠕動之類」とあっても、人々一般として扱われている。要するに「諸天人民」であり、後期の翻訳であれば「有情」や「衆生」とされるもので、とりわけ悪い意味はない。「諸天人民」の項に譲り、ここでは触れない。

二つ目は、「蜎飛蠕動之類」の前に「泥犁禽獣薜荔」がつく場合である(計九回)。

第一願。使某作仏時、令我国中無有泥犁禽獣薜荔蜎飛蠕動之類。得是願乃作仏、不得是願終不作仏。(三〇一上)

これは、「有ること無し」とあることからも分かるように、悪い価値とされている。また五悪段に

當憂斷絶泥犁禽獣薜荔蜎飛蠕動惡苦之道。(三一四上)

と、蜎飛蠕動之類は、悪苦の道であり、それを断絶することを目指すことが言及されている。

次に、「泥犁禽獣薜荔」(地獄畜生餓鬼)について分析する(計六回)。まず、先にあったように須摩題(極楽)にはこの三悪趣はない。須摩題は天・人以上の世界である。また、

第八願。使某作仏時、令我国中諸菩薩欲到他方仏国生、皆令不更泥犁禽獣薜荔、皆令得仏道。得是願乃作仏、不得是願終不作仏。(三〇一下)

と、他方仏国に行く菩薩が更らない境界として描かれる。また、

焰照諸無數天下幽冥之處、皆常大明。諸有人民蜎飛蠕動之類莫

不見阿弥陀仏光明也。見者莫不慈心歓喜者。世間諸有婬泆瞋怒愚癡者。見阿弥陀仏光明。莫不作善也。諸在泥犁禽獣薜荔。考掠勤苦之處、見阿弥陀仏光明、至皆休止、不復治、死後莫不得解脱憂苦者也。（三〇三上）

とあるように、「幽冥之處」「考掠勤苦之處」という語と一緒に描かれ（二回）、阿弥陀仏の光によってその活動が休止する、いわゆる阿弥陀の現世利益の対象としても描かれている。それによって須摩題に往生することも述べられる。（しかし往生して菩薩阿羅漢になるとは書かれていない。）

今とりあげた三つが『大阿』では主に低い境界を指す言葉として登場してくる。

『大阿弥陀経』に説かれる蜎飛蠕動之類の特徴

・それ自身、苦しくつらい境界である。
・善をなさない人間はあえて「男子・女人」と表現されている。
・悪を作した結果、自然に輪廻する境界である。
・須摩題（極楽）には存在しない。
・阿弥陀仏や菩薩に救済される対象として説かれる。
・須摩題に往生しても菩薩阿羅漢になるとは書かれない。

【諸天人民】

ここで分類するときにチェックした単語は主に「諸天人民」「諸天人民蜎飛蠕動之類」「世間帝王人民」「諸天人」などである。

まず定義的には「諸天人民」とは「天上天下人民」という表現もあるように、天界と人界の衆生を指している。『大阿弥陀経』では、

諸天人民中有未得道者、即得道。未得須陀洹者、即得須陀洹、未得斯陀含者、即得斯陀含、未得阿那含者、即得阿那含、未得阿羅漢者、即得阿羅漢、未得阿惟越致菩薩者、即得阿惟越致菩薩。（三〇七中）

などの表現のように「諸天人民（蜎飛蠕動之類）」ですべてのものを表している。特に、是間（娑婆）での衆生をまとめて言う表現になっている。『平等覚経』で「人民」、『無量寿経』で「人天」「衆生」と訳されるものである。

その中で、さらに個々を限定する場合には、「諸天帝王人民若比丘僧比丘尼優婆塞優婆夷」や「諸天人民若善男子善女人」というように下に「若」をはさんで限定する場合が多く見られる。

先に触れた「諸天人民蜎飛蠕動之類」という単語は、「諸天日月星辰諸神国王旁臣長吏人民諸龍鬼神泥犁禽獣薜荔蜎飛蠕動之屬」や「天人民下至禽獣蜎飛蠕動之屬」という表現からも分かるように、「上は天人・人間から下は飛ぶ虫這う虫に至るまで」、という意味を持っている。衆生を（途中を省略して）まとめた言い方である。よって、

名阿弥陀仏。最尊智慧勇猛光明無比。今現在所居国土甚快善、在他方異仏国。教授八方上下諸無央數天人民及蜎飛蠕動之類、

莫不得過度解脱憂苦。（三〇一上）

とあるように、諸天人民（及蜎飛蠕動之類）は阿弥陀仏によって「教授」されたり、「過度」「度脱」されたりする存在であり、また、

即時阿難諸菩薩阿羅漢等諸天帝王人民悉皆見阿弥陀仏及諸菩薩阿羅漢国土七寶已、心大歡喜踊躍。（三一六下）

とあるように阿弥陀仏の救いに対して「歡喜踊躍」したり、名を聞いて「慈心歡喜」したりする存在である。阿弥陀仏にとっては救済の対象となるもの全体である。

これらの「諸天人民蜎飛蠕動之類」は、

諸無央數天人民及蜎飛蠕動之類諸來生我国者悉皆令作菩薩阿羅漢、無央數、都勝諸仏国。（三〇〇下）

とあるように阿弥陀仏国に往生すると、みな菩薩阿羅漢になると述べられている（計二回）。

また、それ自体は善悪において中性的で、まだ価値判断されていない存在であるので、

八方上下無央數仏国中諸天人民皆自然作善、不大爲惡易教化。（三一三中）

などのように、頻繁に「作善する」や「悪をなす」などの動詞が後ろに伴い、それによって楽果を得たり、苦果を得たりすることが描かれる。

また、衆生全体をまとめる言い方以外に、特に在家者を浮き立たせるために「諸天人民」と表現される場合がある。

即衆比丘僧諸菩薩阿羅漢・諸天帝王人民聞之皆歡喜踊躍、莫不讃歎者。（三〇三上）

このように、上に「比丘」とあり、出家的価値である菩薩阿羅漢があり、その次にそれと並んで描かれる「諸天帝王人民」という語は、比丘でない残りのものとして在家者と考えることができる。羅列の途中に、「諸天人民」と出る場合は在家者を指していると考えられる。この文章は「出家の人も、在家の人も」ということを表現する意図があるだあろう。また、

仏説是経時、即萬二千億諸天人民皆得天眼徹視、悉一心皆爲菩薩道。即二百億諸天人民皆得阿那含道、即八百沙門皆得阿羅漢道。（三一七下）

とある。これを見ると、「二百億の諸天人民が、阿那含道を得て、八百の沙門が阿羅漢道を得る」となっている。「阿那含」を得る前のものをおそらく出家でないものとして「諸天人民」と表現しているのだろう。「沙門」と「諸天人民」とをあえて使い分けている。そう考えると、この「諸天人民」も特に在家（もしくは非出家者）を意図して使っていると考えられる。

また、「諸天人民」と別に「諸天人」という表現も出てくる。

諸天人皆復大作伎楽、楽阿弥陀仏及諸菩薩阿羅漢。當是時、快楽不可言。諸天更相開避。後來者、轉復供養如前。（三〇六下）

その場合、諸天人は諸仏を供養したり伎楽で楽しませるものとして出てくる。

『大阿弥陀経』に説かれる諸天人民の特徴

・「諸天人民」は天人と人間という意味である。
・「諸天人民蜎飛蠕動之類」は全衆生を略して述べた語である。
・阿弥陀仏の救済の対象全体としてよく描かれる。
・諸天人民は往生すれば須摩題で菩薩阿羅漢となる。
・まれに、在家を表すものとしての「諸天人民」の語がある。
・諸天人（民）は仏及菩薩阿羅漢を供養する。

【菩薩阿羅漢】

私は「阿羅漢」そして「菩薩」という語を単独で分類するけれども、数多く出てくるこの「菩薩阿羅漢」という表現も別立てて分析する。

『大阿弥陀経』の中で、主語として最も多く登場する表現は、おそらくこの「菩薩阿羅漢」である。是間全体を指す「諸天人民蜎飛蠕動之類」に対して、出家道場の世界である須摩題（極楽）の主語は基本的にこの「菩薩阿羅漢」になっている。菩薩阿羅漢という一まとまりの単語は、他の経典を見ても非常に稀である（支讖訳では『道行般若経』に一ヶ所ある）。ところが、『大阿』では八十七回も出て、主要な主語になっている。

この菩薩阿羅漢という表現は、いったいどんな人を指しているのであろうか。如来に対してしばしば等正覚阿羅漢という言葉が付属するように、菩薩に阿羅漢が付属した言葉かもしれないという可能性も私は考慮した。しかし、

仏語阿難。阿弥陀仏爲諸菩薩阿羅漢説経竟、諸天人民中有未得道者、即得道。未得須陀洹者、即得須陀洹、未得斯陀含者、即得斯陀含、未得阿那含者、即得阿那含、未得阿羅漢者、即得阿羅漢、未得阿惟越致菩薩者、即得阿惟越致菩薩。（三〇七中）

とあるように、やはり「菩薩」と「阿羅漢」という二種類の衆生を合わせて言った表現であることが分かる。この二種類の者を常に同時に主語にして語ろうという意識がこの『大阿弥陀経』では見られる。この「菩薩阿羅漢」という表現は

阿弥陀仏国諸菩薩阿羅漢衆比丘僧故如常一法、不異爲増多。（三〇八上）

と比丘僧であることが明示されている（合計四回）。

また、須摩題のことを『大阿』では、「阿弥陀仏及諸菩薩阿羅漢国土」という言い方をする（三回）。そこには阿弥陀とそのサンガたちの国という意識が見える。『大阿』では、

諸無央數天人民及蜎飛蠕動之類諸來生我国者、悉皆令作菩薩阿羅漢、無央數、都勝諸仏国。（三〇〇下）

とあるように、是間で「諸天人民蜎飛蠕動之類」であったものが、須摩題で「菩薩阿羅漢」になることが繰り返し説かれる。そして、この引文にもあるように、須摩題では、すべての衆生が菩薩阿羅漢であることが説かれる。（ただし、「諸天人」などもおり、経典全体で

の整合性は確かではない。）また、須摩題において

復令他方面各千須弥山仏国中諸天人民蜎飛蠕動之類皆復使得入道、悉令作辟支仏阿羅漢、皆令坐禪一心、合其智慧爲一勇猛、共欲數阿弥陀仏国中諸菩薩阿羅漢知有幾千億萬人、皆無有能知數者。（三〇九上）

とあるように、菩薩阿羅漢は数えられないほど多いことが述べられている。須摩題での主語であるこの菩薩阿羅漢は様々に形容される。

其諸菩薩阿羅漢面目皆端正、淨潔絶好、悉同一色、無有偏醜惡者也。諸菩薩阿羅漢皆才猛黠慧。（三〇三下）

とあるように、「面目端正」であり、「同一色」であり、また、

諸菩薩阿羅漢悉皆洞視、徹聽、見知八方上下去來現在之事、復無數天上天下人民及蜎飛蠕動之類心意所念善惡・口所欲言、皆知當何歳何劫。得度脱得人道、往生阿弥陀仏国。知當作菩薩阿羅漢。皆豫知之。（三〇八中）

とあるように天眼・天耳・他心通などの様々な神通力を持つとされる。その他にも、婬泆・瞋恚・愚痴がなく、たがいに敬愛すると述べられる。智慧があるため光明を具えているとも言及される。また、

諸菩薩阿羅漢所居舍宅皆復以七寶金銀水精琉璃珊瑚虎珀渠碼瑙化生、轉共相成。（三〇四上）

阿弥陀仏及諸菩薩阿羅漢講堂・精舍・所居處舍宅中内外浴池上皆有七寶樹。（三〇五上）

などとある。菩薩阿羅漢は、須摩題の基本的な衆生であるため、舎宅や七宝樹などの環境世界と絡めて言及されることも多い。

また、出家修行者であることから

諸菩薩阿羅漢中有誦経者、其音如三百鐘聲。中有説経者、如疾風暴雨時。（三〇七下）

と経を暗誦することが描かれたり、

仏言。阿弥陀仏及諸菩薩阿羅漢欲食時、即自然七寶机・劫波育闍・疊以爲座、仏及菩薩皆坐前。（三〇七上）

と、その菩薩阿羅漢の机や衣のことも言及される。また、

諸菩薩皆大歡喜、俱於虚空中、大共作衆音自然伎楽、楽諸仏及諸菩薩阿羅漢。當此之時快楽不可言。（三〇六下）

諸天人皆復大作伎楽、楽阿弥陀仏及諸菩薩阿羅漢。（三〇六下）

とあるように、仏と一緒に諸菩薩や諸天人に供養されることが繰り返し述べられる。ここでも「仏及諸菩薩阿羅漢」とあるが、おそらくそのときの「菩薩阿羅漢」は「仏法僧」の「僧」という意識で描かれているだろう。

『大阿弥陀経』に説かれる菩薩阿羅漢の特徴

・菩薩阿羅漢とは菩薩と阿羅漢のことである。
・菩薩阿羅漢は比丘である。
・須摩題は別名「阿弥陀仏及諸菩薩阿羅漢国土」と言われる。
・須摩題の衆生はすべて菩薩阿羅漢であると描かれる。
・是間の諸天人民蠕動之類は須摩題に往生し菩薩阿羅漢になる。

・面目端正であり、智慧勇猛であり、様々に形容される。
・天眼・天耳・他心通・神足通・宿命通などの神通力をもつ。
・須摩題での舎宅や七宝樹などの環境に絡めて言及される。
・飲食や衣・鉢など修行に関連したことも言及される。
・よく仏と一緒に「仏及諸菩薩阿羅漢」として描かれ供養される。

【阿羅漢（単独）】

「菩薩阿羅漢」という書き方ではなく、ただ単独に「阿羅漢」もしくは「羅漢」と表記されるものを分析していく。

「阿羅漢」という言葉にはどうも二種類ある。固有名詞の「阿羅漢」と弟子道のまとめとしての阿羅漢とである。

諸可教授弟子者、展轉復相教授、轉相度脱、至令得須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢・辟支仏道。轉相度脱、皆得泥洹之道悉如是。（三〇八下）

という文章があるが、ここに直接「阿羅漢」と表記されるのが固有名詞の阿羅漢である。そして、ここで「弟子」という言葉が、これらをまとめて使われているけれども、それと同じやり方でまとめとして「阿羅漢」という言葉が使われる場合がある。

仏言。阿弥陀仏国諸菩薩阿羅漢衆等大聚会自然都集。（三一一下）

とあるように、常に弟子道を代表するときに「阿羅漢」という言葉を前面に出している。ここに、例えば「諸菩薩須陀洹」という風には出てこない。このまとめとしての阿羅漢は、須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢（もしくは辟支仏）を含み、「究極的には阿羅漢果を求める人全体」という意味であろう。

阿羅漢の特徴としては、まず

若問仏者勝於供養一天下阿羅漢辟支仏、布施諸天人民及蜎飛蠕動之類累劫百千億萬倍也。（三〇〇中）

とあるように、供養される側として描かれている。これは一般に「応供」と呼ばれる阿羅漢の定義からしてもふさわしい。逆に、阿羅漢が供養するとは決して書かれない。（それに対して、菩薩には供養し、供養されるという両方についての言及がある）また、

仏説是経時、即萬二千億諸天人民皆得天眼徹視、悉一心皆爲菩薩道。即二百億諸天人民皆得阿那含道、即八百沙門皆得阿羅漢道。（三一七下）

とあるように、他の衆生（例えば菩薩）に比べて固有名詞の阿羅漢は数が少ないものとされている。また、声聞道のヒエラルキーの中では、限定された人しかなれない上位の価値が与えられている。それに比べて、須摩題においては

仏言。阿弥陀仏国諸阿羅漢般泥洹去者無央數、其在者新得道者亦無央數、都不爲増減也。（三〇八上）

と、その般泥洹する阿羅漢の数が無央数であるとされている。

蓋樓亘（観音）菩薩・摩訶那鉢（勢至）菩薩と光明を比べた場合は、

其諸菩薩頂中光明各照千億萬里。諸阿羅漢頂中光明各照七丈。（三〇八中）

と、低いものとされている。この「菩薩より低い」という価値判断は列挙されたときの並ぶ順番からも裏付けられる。

また阿羅漢は是間にも須摩題にも存在するが、「往生」などのようにその二仏国土間を移動する言及は一度もない。また

佛言。阿彌陀佛國諸阿羅漢中、雖有般泥洹去者、大海減一滴水爾。不能令在諸阿羅漢爲減知少也。（三〇七下）

とある。阿羅漢は一仏国土内で最終的に般泥洹（涅槃）する存在である。菩薩のように他方仏国土へ輪廻（往来）したりはしない。

『大阿弥陀経』に説かれる阿羅漢の特徴

・固有名詞の阿羅漢と、まとめとしての阿羅漢の使い分けがある。
・供養される存在として描かれる。
・菩薩に比べて阿羅漢の数は少なく描かれている。
・須摩題では般泥洹する阿羅漢は無央数である。
・菩薩よりは低いランクに位置している。
・是間から須摩題への往生（再生）は説かれない。

【辟支仏】

『大阿弥陀経』で「辟支仏」は八回出る。これは、他に比べると、「ほとんど出ない」と言ってもよい程度の回数である。

明聽。悉令八方上下諸無央數仏国中諸天人民蜎飛蠕動之類皆使得入（人）道、悉令作辟支仏阿羅漢、共坐禪一心、都合其智慧爲一勇猛、共欲計知阿弥陀仏壽命幾千億萬劫歳數、皆無有能計知者。（三〇九上）

とあるように、八箇所すべて阿羅漢と併記された形で登場する。そして、智慧においてすぐれた能力をもつものの代表として描かれている。また、阿羅漢と同じく供養される存在として描かれる。『大阿』で特徴的なこととしては、

不獨我稱譽阿弥陀仏光明也。八方上下無央數仏・辟支仏・菩薩・阿羅漢所稱譽皆如是。（三〇三上）

という順番で描かれていることである（計二回）。阿羅漢・菩薩より序列が上で、仏よりは下という位置づけがうかがえる。これは阿羅漢・辟支仏を二乗として貶めていく大乗仏教の中では特異な価値付けである。『大阿』の古さが窺える。藤田宏達氏が、

この様に、辟支仏は最初から釈尊とは区別された、従って劣る地位に置かれるものであった。しかし苟くも仏陀の一種とされる限りは、これを仏弟子と同格に見ることは出来ない。即ち、辟支仏は釈尊と仏弟子との差別を強く意識する様になった時期において、偶々その中間に位置づべき存在となり得るものであった。④

と言われたことを考慮すれば、辟支仏が菩薩より上位にあるのも頷くことができる。辟支仏と仏との間には何ものにも入り込めない密

接さがあるだろう。

『大阿弥陀経』に描かれる辟支仏の特徴

・阿羅漢と併記され、供養される存在として描かれる。
・智慧・計算において優れた能力をもつ。
・阿羅漢・菩薩より上の序列の存在である。

【菩薩（単独）】

ここでは先の「菩薩阿羅漢」とは別に単独で「菩薩」が出てくるものをピックアップして分析した。

「菩薩」は大乗仏教では新しい修行者の形態として登場する。『大阿』においても「菩薩」に関する言及は多い。「菩薩」は、阿羅漢や辟支仏や諸天人民に比べ、並び順では

若其然後作仏者、亦當復爲八方上下諸無央數仏・辟支仏・菩薩・阿羅漢所稱譽光明如是也。（三〇三中）

とあり、辟支仏よりは低く、阿羅漢よりは高く価値付けされている。『大阿』では阿弥陀の前身である曇摩訶（法蔵）菩薩が菩薩道を作すものとして登場し、

仏告阿難。阿弥陀爲菩薩時、常奉行是二十四願、分檀布施、不犯道禁忍辱精進一心智慧、志願常勇猛、不毀経法、求索不懈。（三〇二中）

と、菩薩として六波羅蜜を行うことが説かれている。また、

其作菩薩者、皆欲令悉作仏。作仏已、轉復教授八方上下諸天人民及蜎飛蠕動之類。（三〇八下）

と、菩薩は次に仏になり、諸天人民蜎飛蠕動之類（衆生）を教授することが言及される。これらは一般的な菩薩思想に共通する要素である。また、『大阿』では「摩訶薩」や「菩薩摩訶薩」という語は出てこない。また、先に見たように、阿羅漢に比べると多くの菩薩がいることが述べられている。『大阿』には菩薩の階梯として

仏言。是諸菩薩皆阿惟越致、諸比丘僧中及小菩薩輩無央數、皆當往生阿弥陀仏国。（三一七中）

と、「阿惟越致菩薩」・「小菩薩」という少なくとも二種類を認めることができる。その阿惟越致菩薩は

仏言。其欲求作菩薩道生阿弥陀仏国者、其人然後皆當得阿惟越致菩薩。阿惟越致菩薩者、皆當有三十二相紫磨金色八十種好。皆當作仏。隨所願在所求欲、於他方仏国作仏、終不復更泥犁禽獣薜荔。（三一一上）

とあるように、紫磨金色・三十二相・八十種好を得るとしている。また、他方仏国に輪廻し、最終的に作仏する時に、三悪趣に更らないことが保障されている。また、その輪廻して修業することに関係するが、「菩薩」は「精進（する）」という語と強い関連性を持って語られる。また、

諸菩薩中有最尊兩菩薩。常在仏左右坐侍正論。仏常與是兩菩薩共對坐、議八方上下去來現在之事。若欲使是兩菩薩到八方上下

無央數諸仏所、即便飛行。隨心所欲至到飛行。使疾如仏、勇猛無比。其一菩薩名蓋樓亘。其一菩薩名摩訶那鉢。光明智慧最第一。頂中光明各焰照他方千須弥山仏国中常大明。其諸菩薩頂中光明各照千億萬里。（三〇八中）

と、一般に大菩薩と言われる「蓋樓亘（観音）」「摩訶那鉢（勢至）」も出てくる。この二菩薩は、

仏言。世間人民若善男子善女人若有急恐怖縣官事者、但自歸命是蓋樓亘菩薩摩訶那鉢菩薩所。無不得解脱者。（三〇八中）

とあるように、単独で救済者になっている。

また、菩薩の行いとして

諸菩薩供養聽経訖竟、便皆起爲仏作禮而去。即復飛到八方上下無央數諸仏所、供養聽経皆各如前。悉遍已後、日未中時、各飛還其国、爲阿弥陀仏作禮、皆却坐聽経竟、大歡喜。（三〇六下）

と、菩薩が他方仏国に行き、諸仏を供養して経を聴くという記述がある。これは何度も繰返し出てくる。それが六波羅蜜以外で菩薩に付属する一つのタスクになっている。須摩題では供養が自由自在にでき、菩薩が大歓喜することが述べられる。

『大阿弥陀経』における菩薩の特徴

・阿羅漢以上、辟支仏以下に価値づけられている。
・六波羅蜜を修行し、仏になることを目指す。
・阿惟越致菩薩・小菩薩の二階梯が認められる。
・阿惟越致菩薩は三十二相・紫磨金色・八十種好を具える。
・供養のため他方仏国に輪廻しても三悪趣に更らない。
・精進するということと強い関連性をもつ。
・蓋樓亘・摩訶那鉢などの固有な菩薩にも言及する。
・仏国土間を自由に往来できる（阿羅漢はできない）。

まとめ

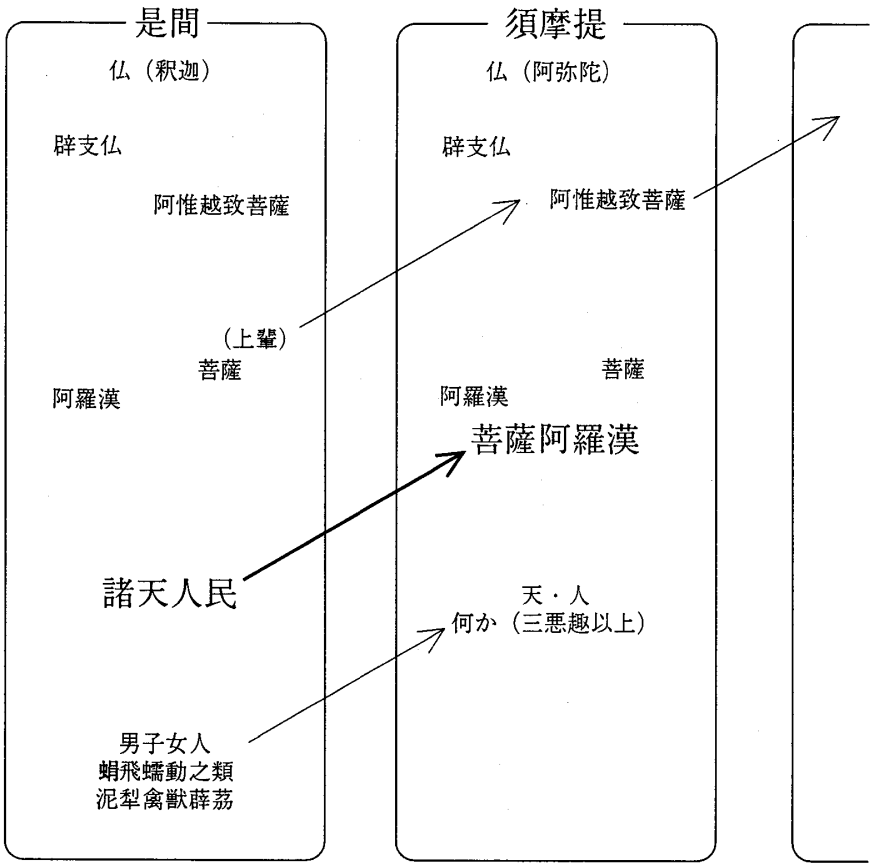
単に序列だけを縦に並べるならば

仏―辟支仏―菩薩―阿羅漢―諸天人民―蜎飛蠕動之類

という価値関係が窺える。（図参照）

また、まとめとして菩薩と阿羅漢と菩薩阿羅漢の関係を再確認する。

基本的に須摩題の主語は菩薩阿羅漢でいこうという意識は見える。そこから考えると、『大阿弥陀経』の中の言及で「菩薩」とある場合、本当は「菩薩阿羅漢」としたかったところを、阿羅漢の性質と矛盾がおきるため単に「菩薩」としたとも考察できる。菩薩阿羅漢から引き算した「菩薩」である。「阿羅漢」についても同様に引き算した「阿羅漢」として言っているとも考えられる。あるときは「菩薩」もしくは「阿羅漢」とし、あるとき（何の支障もないとき）は「菩薩阿羅漢」とした。そのときの判断基準によって、当時のおおよその定義を窺い知ることができる。



総合して見た結果、「菩薩阿羅漢」というのは「仏及菩薩阿羅漢」とあるときに顕著に分かるように、ほとんど「仏と僧」というときの「僧」に相当していることが確認できた。

考察

『大阿弥陀経』に今回の分類のような揺さぶりをかけた結果、多少新たに考察できたと思う点を仮説を含め述べる。

①出家の菩薩と在家の菩薩

『大阿』において菩薩を考えるとき、この菩薩というのははたしてすべて「出家」として語られているのであろうか（「菩薩阿羅漢」とあるときは比丘であった）。初期大乗経典である『阿閦仏国経』『般舟三昧経』『法鏡経』などには、出家菩薩と在家菩薩の両方に対する言及があるけれども『大阿弥陀経』においてはどうなのだろうか。

是間（娑婆）では明確に分けられている。出家して菩薩道を作すものは上輩であり、その行者が須摩提に往生するなら阿惟越致菩薩になると書かれてある。出家が「上」とされているため、「修行するものとしての理想的な形態は出家だ」という伝統的意識は受け継いでいることが確認できる。

次に、中輩と対応する第六願を見ると、

第六願。使某作仏時、令八方上下無央數仏国諸天人民若善男子

善女人欲來生我国、用我故益作善、若分檀布施、遶塔燒香、散花然燈、懸雑繒綵、飯食沙門、起塔作寺、斷愛欲、來生我国作菩薩。得是願乃作仏、不得是願終不作仏。（三〇一中）

とあり、本来ならば昇天するはずの在家者が仏国土に行って菩薩になるとされている。もし、次の輪廻に菩薩となる者をすでに「菩薩」と考えてよいならば、『大阿』には在家菩薩もいることになる。よって、是間においては『大阿』では一応出家菩薩も在家菩薩も語っていると考えることができる。

ところが、須摩題において一般化された菩薩を考える時は、少し話が違ってくる。確認したように『大阿』では菩薩が諸仏（及諸菩薩阿羅漢）を供養することが述べられる。菩薩の行う供養は諸天人の行う供養とおそらく違う種類のものであり、単純に菩薩阿羅漢を讃美したり楽しませたりする行為とは異なると私は考えている。菩薩の行う供養は、釈迦と同じ伝統にのっとっている。釈迦が三阿僧祇劫・九十一劫の輪廻を経て仏になったように、多くの仏を供養することで「菩薩」ははじめて仏になることができる。他国を飛び交うというのは輪廻することであり、輪廻を想定に入れての修行である。（菩薩の定義の中に「輪廻して修行する」という文脈をもっと汲まないといけない。）

菩薩の諸仏供養は輪廻を繰返して行うことであるから、あるときは出家、あるときは在家となる。そのため須摩題の菩薩は出家在家の区別が明言されないのであろう。「出家」「在家」という枠組みの当てはめ方は、二仏国土以上の輪廻を想定する仏国土経典場合はナンセンスなのかもしれない。いずれにせよ、一度菩薩となったあかつきには、その存在は阿羅漢と併記され、志の高いものとして尊敬して扱われている。

②二つ目に菩薩と阿羅漢との関係について焦点を当ててみたい。静谷正雄氏は「『大阿弥陀経』になると、声聞・縁覚の教義をけなすところが全く無い」[5]との見解を出しているが、今回の分類からどう考察できるのだろうか。

基本的に阿羅漢コースと菩薩コースの二コースが設定されている。ほぼ一方的に菩薩ばかりが言及される後期無量寿経とは違い、『大阿弥陀経』ではっきり二種類のコースが分かれ、その両コースともにしっかり配慮し、言及している。

ただ、生因願・往生段・その他様々な往生ルートを見ても、阿羅漢道というコースを経て往生することは一度も勧められていない。阿羅漢は一仏国土内でしか語られない存在であることが確認できる。須摩題でも般涅槃することが言及されるだけである。二仏国土以上を往来できる存在ではない。衆生の往生だけに話を狭めて『大阿』を見ると、「菩薩」というのは十方諸仏世界と密接に関わる存在であり、その点で「阿羅漢」と大きく異なった存在であることが分かる。阿羅漢は般涅槃する「古い型のブッダ」をモデルとしており、菩薩は輪廻してまで修行する「新しい型のブッダ」をモデルとして

いるのかもしれない。『大阿弥陀経』ではたまたまその両者が強い価値的区別を設けられないままに淡々と描かれているように読み取れる。下田正弘氏が

大乗と小乗とを「相互に重なりのない、対立し続ける実態的な存在」とは捉えないほうがよい。それは最大限言い得ても、あくまで連続しつつ、徐々に質を異にしはじめたものである。[6]

と言われた。この見解はこの『大阿』を見ていく上でも参考になる。阿羅漢と菩薩が実に質を異にしていく前段階がきれいに残存していると私は見ている。また、下田氏は

総じて経典においての発展は、以前の要素を排除してしまうことなく、残滓を残しつつ共存する。[7]

と述べている。この言葉も示唆が大きい。『大阿』でも、阿羅漢をけなさないが、菩薩の優位が説かれるという形になっている。佐々木閑氏も

それまで聖典として権威を持っていた阿含には書いてないような新しい教義が少しずつ信奉者が増え、そして少しずつ権威をつけていったであろう。[8]

と述べている。『大阿弥陀経』では、「菩薩阿羅漢」という主語が成り立ち、「菩薩」とほぼ同じくらい「阿羅漢」に対しても配慮している。そこに『大阿弥陀経』の大乗経典としての古さが窺える。『無量寿経』になると、阿羅漢に対する言及が大幅にカットされる。佐々木氏が言われるように、そこに大乗仏教が「少しずつ権威をつけていった」背景を読みとることができる。

③この衆生観から阿弥陀仏国の特質が浮かび上がる。

まず、三悪趣がいないことが明言されている。つまり須摩題は人天のみの境界の処として設定されている。そのため、須摩題に往生するためには少なくともわずかばかり（一日一夜）でも善業（善行）を行うことが要求されることになる。悪をなして須摩題に生まれる思想はない。その意味で、業と輪廻の因果関係が他方仏国土に応用されていることが確認できる。

この『大阿弥陀経』は、諸天人民蜎飛蠕動之類が菩薩阿羅漢になることを基本ラインに設定している。「すべての人がそこで修行する」という文脈がある。須摩題は基本的にすべてが菩薩阿羅漢（出家）であり、単に存在するだけの衆生はいない。『大阿弥陀経』の須摩提においては衆生＝修行する衆生（菩薩阿羅漢）という図式が成立している。

さらに、『大阿』の段階では、須摩題は、「菩薩」が次に仏になるために修行するための優れた環境であり、いわば修行の中継地点である（菩薩は須摩題で仏になることができない）。「修行するなら環境の整った須摩題に行って修行しよう」という感覚があるだろう。須摩題は、一瞬にして無数の仏国土へ行き、修行することが可能な場である。菩薩は「須摩題に行くことでブッダになるために行うべき三阿僧祇劫の修行をわずかな時間で積むことができる」という文脈

をもっているだろう。

須摩題でさえやはり十方諸仏世界の一つの仏国土という側面を持っている。「菩薩」に焦点を当ててみた場合、例えるなら、須摩題は有名な進学校みたいなものかもしれない。決して、須摩題自体が後に解釈されるような「ゴール」や「目的」にはなっていない。

注

① 中川英尚氏は「無量寿経における菩薩観」『日本仏教学会年報五一』において同様の関心により論じている。

② 辛嶋静志「大阿弥陀経訳註」『仏教大学総合研究所紀要』六～九号、一九九九～二〇〇二。

③ 分析の対象外としたのは「比丘比丘尼優婆塞優婆夷」「善男子善女人」などである。前者は、出家か在家かという観点からの衆生の呼称であり、今回の観点にはそぐわない。後者の枠組みは包含する範囲が大きすぎるため除外した。

④ 藤田宏達「三乗の成立について」『印度学仏教学研究』一〇号、一九五七。

⑤ 静谷正雄『初期大乗仏教の成立過程』百華苑、一九七四。

⑥ 下田正弘『涅槃経の研究』春秋社、一九九七、五〇頁。

⑦ 同、二九二頁。

⑧ 佐々木閑「部派仏教の概念に関するいささか奇妙な提言」『初期仏教からアビダルマへ』平楽寺書店、二〇〇二。